

トークンからみたウルク・エクспанション

木原 徳子

Uruk Expansion Reviewed from Token

Noriko KIHARA

本稿では、アルガーゼのウルク・ワールドシステム論によるウルク・エクспанションの解釈 (Algaze 1993) を再考察することを目的として、ウルク遺跡のトークンと西アジアに分布するトークンとの互換性の有無を中心に、各地のウルク文化受容の度合いを考察した。その結果、南メソポタミア人の植民地とされるスーサやハブバ・ケビラでは、ウルクのトークンシステムを採用していると解明された。少数の南メソポタミア人の入植地とされるハジュネビのトークンも、ウルクのトークンと互換性があると判断された。上述の地域以外は、ウルク式トークンを使用していたのではなく、土器新石器時代からの伝統的な物資管理方法を踏襲していると想定された。

キーワード：ウルク・ワールドシステム論、ウルク・エクспанション、トークン、都市化、物資管理法

In this article I reconsider the Uruk Expansion proposed by Algaze on the Uruk World System (1993). Discussion focuses on tokens and an examination of the extent of cultural adaptation at each site. The argument is based on the question of compatibility between Uruk tokens and other token that have been found throughout Western Asia. A comparison of the type and size of tokens from Uruk and other contemporary sites leads to the following conclusions. Susa and Habuba Kabira, which until now have been considered southern Mesopotamian colonies, adopted the token system of Uruk. Hacinebi's token system was also compatible with that of Uruk. However, other contemporary sites produced tokens incompatible with those of Uruk and the suggestion is made that these sites continued to use the traditional administration system with their respective local tokens, that probably originated in the Neolithic period.

Key-words: Uruk World System, Uruk Expansion, Token, Urbanization, Administration system

ウルク様式遺物の再検討

本稿では、ウルク様式遺物の一つであるトークンとそれに類似した小型幾何学形製品¹⁾を扱う。トークンは、数 cm 程の幾何学形を呈した粘土製品で、紀元前 4 千年紀頃西アジア各地で使用されていた (図 1)。ウルク・エクспанション期において、トークンは広域な拡がりを見せつつも、分布はまばらである。これは物資管理に関わる遺物で、その要素の一部は数字粘土板を経て絵文字粘土板へと受け継がれたと言われている (Vallat 1986; Nissen 1986)。トークンは、物資管理の際に簿記や、計算の道具 (カウンター) として使用されたと考えられる。ブツラやエンヴェロップと共に使用された場合、送付品の証明として広域間を移動していた可能性もある。ウルク・エクспанションが経済活動最重視の交易論から説明される場合、それを論証する重要な遺物となるのである。

南メソポタミア人が経済活動の競合により遠隔地との結

びつきを強める必要に迫られたなら、当然それに関わる物資管理システムも統一したであろう。トークンとはその性

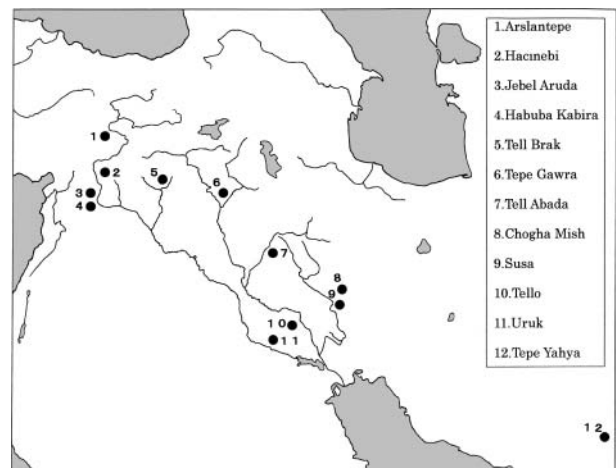


図 1 トークンが出土した主な遺跡 (本稿で言及した遺跡)

質上、トークンを見てその意味²⁾を理解できなければ使用できない。そういった意味では、情報伝達手段の一つと捉えることも可能である。しかしながら、広範囲に分布するトークンは、統一されたシステムの下で使用されていたのだろうか。本稿では、ウルクで使用されていたトークンとそれ以外の遺跡で使用されていたトークンが共通の規格を有していたかどうかを検討する。ウルクのトークンシステム³⁾を解明し、それが西アジア一帯で通用するものだったのか否かを検討することは、当時の経済活動の様相を探るうえで重要な論点になるだろう。

トークンの用途とトークンに込められた情報

P. アミエはスーサ (Susa) 出土の小型幾何学形製品を計算道具と評価した (Amiet 1966)⁴⁾。D. シュマン・ベセラは、この小型幾何学形製品が古い時代から西アジア全域で出土してきた粘土製品と近似していることを指摘し、トークンとして取り挙げるようになる。その使用方法に対する見解はアミエの延長線上にあるが、新たに氏がコンプレックス・トークンと名付けた遺物がウルク絵文字になったと主張する (Schmandt-Besserat 1992a)。コンプレックス・トークンには、物資を表現するものが出現し、同じ形状のトークンを数個まとめて使用することにより、その物資の個数をあらわしたというのだ。トークンと文字起源との関連性が語られるようになったため、シュマン・ベセラの著作は注目を浴びた (Morrison 1992) が、批判もまた多い (Runnels 1993; Michalowski 1993)。トークンの出土する考古学的コンテクストに対する検討が不十分であり、青銅器時代のトークンの役割を先史時代にまで無批判に敷衍している。ただし、このような批判も、問題点の指摘にとどまり、新たな改善点は提示されてはいない。

絵文字粘土板は誕生時から文字記録システムとして整ったものであるため (Green 1981)、絵文字粘土板以前に、トークンに数的、文字的要素を含ませそれらを操作していた可能性はある。しかし、前川和也が批判しているように「トークンから粘土板へ、という単系進化主義的な説明」(前川 2001: 6) はやはり推論の域を出ない。形態のみに依拠して絵文字粘土板から単純に遡ることでは、トークンの元来の意味が数なのか単位なのか、物資自体なのかさえ判断できず、まして、具体的な意味など判断する段階に至っていない。

トークンを使用する人々が、それらの一つずつ見てそこに含まれる情報を理解し、適切な処理をしていたのは間違いないであろう。ただし、トークンが移動性のあるものだったのか否かは現状では判断できない。従って現在トークンと一括されているものが、異なる集落間で同様の認識の下に使用されていたかは未だ詳らかでない。トークンの出

土する集落内では、そのトークンが有する情報を把握していたということのみが推定できるのである。

トークンの再分類によるウルク規格品・規格外品の抽出

ウルク中・後期及びその併行期のトークンが、西アジア一帯で同規格であったのか、あるいは各地で独自の規格を用いていたのかを検討するため、トークンの整理を行う。まず、ウルク遺跡出土トークンを把握するため、形状及び施される文様に基づいて再分類する。当時の人々がトークンからその意味を推し量る際、その形状と文様を手掛かりにしていたと考えるからである。

シュマン・ベセラはトークンを立体形状から16種類に区分し、さらに文様や穿孔の有無等で細分しているが (Schmandt-Besserat 1992b)、時期幅を考慮せず紀元前8千年紀からのトークンを全て列挙し、530種類ものトークンを析出している。トークンの規格性を考えるためには、規則を共有するトークンを同一タイプとしてまとめることが全体を見通すために必要である。

材質に関しては、氏はトークンを「粘土でできた小さな遺物」で「時に石やアスファルトでできたもの」としている (Schmandt-Besserat 1992a: 29)。形状や文様が統一されていればトークンは機能すると考えられるため、ここでは材質で分類しない。ただしほとんどのトークンは粘土製品である。

穿孔に関しては、トークンとブツラを繋ぐ紐を通した可能性も指摘されているため (Schmandt-Besserat 1992a: 109)、穿孔の有無はトークンの性格を探るうえで重要なポイントとなる。穿孔の有無を分類基準としたいところではあるが、報告書における穿孔区分が曖昧なため、残念ながら本稿では穿孔の有無は基準としない。

さらに、氏はトークンをプレイン・トークンとコンプレックス・トークンの2種類に大別し、それぞれ装飾のないもの、刻線文や貼付文等で装飾されているもの、と定義している (Schmandt-Besserat 1992a: 13)。この分類は、氏の論点において重要なポイントとなる。則ち、プレイン・トークンが農耕開始期頃、集落単位で物資の管理をする必要性から製作されるようになり、ウルク期になり都市に集積される物資の種類や量が圧倒的に多くなったためコンプレックス・トークンが新たに付け加えられたとする。また、プレイン・トークンが絵文字粘土板の数字部分に、コンプレックス・トークンが絵文字部分に発展していくという主張を繰り返している。しかし、無文のトークンでもコンプレックス・トークンに属するものがあり、両者の判断基準が不明瞭である。従って、この区分も本稿の分類基準としない。

こうした基準の代わりに、本稿ではエンヴェロップに封

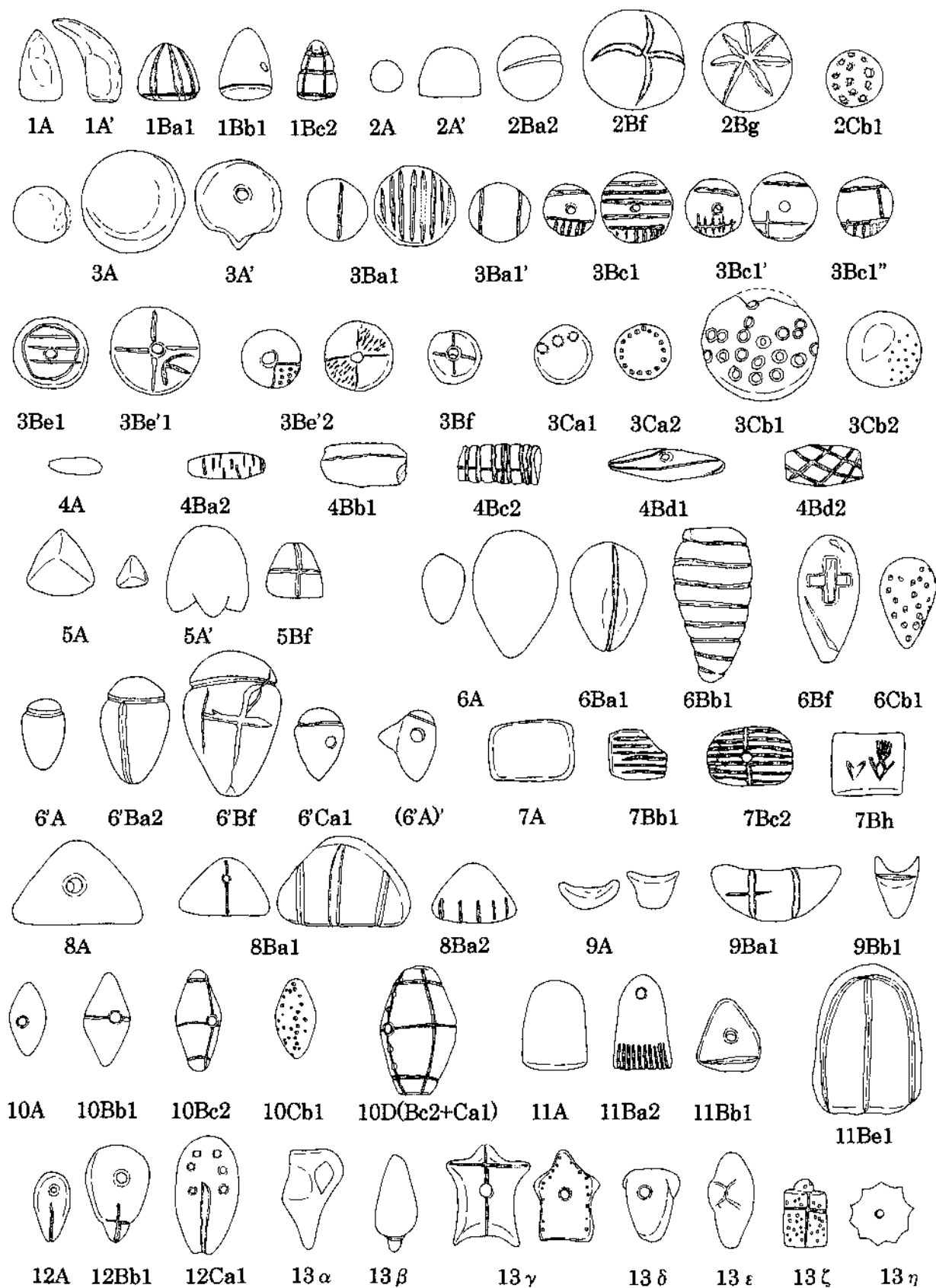


図2 ウルク遺跡出土トークン分類図 (スケール 3/5)

表1-1 対象遺跡出土トークン

Uruk	Susa	Tello	Habuba Kabira	Chogha Mish	Hacinebi	Tepe Yahya	Jebel Aruda	Tepe Gawra	Tell Brak	Arslantepe	Tell Abada
1A	○	○	○	○		○	○	○	○		○
1A'		○						○			○
1A''	○	○									
	1A'''					○					
1Ba1	○										
1Bb1	○								○		
1Bb2											○
1Bc2	○		○								
	1Ca1								○		○
2A	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○
2A'	○					○	○	○			○
	2A'(Ba1)	○									
	2A'(Bb1)										2A'(Ba2)
2A''											
2Ba2	○	○	○								
2Bf	○										
2Bg											
2Cb1			○								
3A	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
3A'	○										
3Ba 1	○	○	○		○	○					○
3Ba 1'	○		○								
3Ba1''											
3Bc1	○		○								
3Bc1'											
3Bc1''											
3Be1											
3Be1'			○								
3Be2											
3Bf	○	○	○								
3Ca1	○							○			○
3Ca2	○										
3Cb1											
3Cb2	○		○								
4A	○		○			○		○	○	○	○
4Ba2						○					
4Bb1		○									
4Bc2											
4Bd1	○										
4Bd2	○										
											4
5A	○	○		○		○		○			
5A'	○	○	○								
5Ba1	○										
5Bf											
	5Ca1			○		○					
6A	○	○	○	○		○		○	○		
6Ba1											
6Bb1	○		○								
6Bf		○	○								

表1-2 対象遺跡出土トークン

Uruk	Susa	Tello	Habuba Kabira	Chogha Mish	Hacinebi	Tepe Yahya	Jebel Aruda	Tepe Gawra	Tell Brak	Arslantepe	Tell Abada
	6Ca1		○								
6Cb1											
6'A	○	○						○			
6'Ba2	○										
6'Bf	○										
6'Ca1	○										
(6'A)'	○		○								
7A	○	○	○	○		○		○			○
7Bb1	○										
7Bc2	○	○									
	7Cb2										
7Bh	○										
	7Bi										
8A	○	○	○	○		○					
8Ba1	○		○								
8Ba2	○		○								
8Bc2	○	○									
	8D (Ba1+Ca1)	○									
9A	○	○		○							
9Ba1	○		○								
9Bb1	○										
9D (Ba1+Ca1)											
10A								○	○		
	10Ba1										
10Bb1	○		○								
10Bc2											
10Cb1											
10D (Bc2+Ca1)											
11A	○	○								○	○
11Ba2	○	○	○								
11Bb1											
	11Bc1										
11Be											
11Be1	○	○									
11D (Bb1+Ca1)											
12A	○		○								
12Bb1											
12Ca1		○					○				
13a	○		○			○					○
13β	○		○								
13γ	○								○		
13δ	○		○								
13ε	○	○	○								
13ζ	○	○									
13η		○									

・網掛け部分はE型

・帰属タイプは基本的に変わらないが、形状の一部や文様に相違がある場合、ダッシュを付した。例えば1A類と1A'類の違いは、1A類がほぼ均整のとれた円錐形であるのに対し、1A'類は円錐形に近いが先端が曲げられているものである。それぞれの形状を異なった立体と捉えず、1A'類を1A類に準ずるものとした。

・アバダ出土の棒状トークンの一部は、文様が彩文のため、単に4類と分類した。

入されているか否かでトークンを2種類に大別する。それは、のちの絵文字粘土板における数字部分が、エンヴェロップに封入されたトークン由来である可能性が極めて高いためである (Vallat 1986)。エンヴェロップに封入されているトークンと同じ形状・文様であると筆者が判断したトークンをE型 (Enclosed type)、エンヴェロップに封入されていないトークンをI型 (Independent type) とする。

トークンの文様以外に注目すると、エンヴェロップに封入されているトークンにはサイズに差異があることが看取される。絵文字粘土板上に表現される円形等の文様のサイズの差異は数字の大きさの違い⁵⁾を意味する (Nissen et al. 1991: 68)。従ってサイズも当時の人々が各々のトークンを識別する際の目安となっていた可能性があるため、再整理することとした。

以上の作業を通して、ウルク出土トークンの規格を設定する。

次にウルク遺跡出土トークンと同一タイプのトークンが他の遺跡で出土しているか否かを検証する。同一タイプとは、同じ規則⁶⁾に則り文様が施されているものを指す。例えば、刻線文の施し方にいくつかパターンがあるが、刻線の本数のみ異なる場合は同タイプとする。この作業から、トークンの規格が統一されていたか否かをある程度検討できる。

さらに、ウバイド期のトークンで出土状況が明瞭なテル・アバダ (Tell Abada) 出土トークンを参考に、ウバイド期のトークンシステムがウルク期のトークンシステムに影響を与えているかどうかを考察する。

ウルク遺跡出土トークン

ウルク遺跡出土トークンを主にシュマン・ベセラの著作 (Schmandt-Besserat 1992b) に掲載された資料を参考に再分類したところ、幾何学形を基本とした12種類とそれらに含まれない具象的なものに区分され、図2のようになった。また、ウルク遺跡出土トークン及び対象遺跡出土トークンのサイズの統計をとった⁷⁾ところ、図3～7のようにまとめられた。

1類 (図2の1A類から1Bc2類) は円錐形トークンとした。43点の円錐形トークンのうち、26点はE型のトークンである。①底面の直径7～19mm・高さ12～28mmと②底面の直径20～29mm・高さ30mm程の2種類のサイズに大別される。それぞれ小型、大型のものとする (図3)。

2類 (図2の2A類から2Cb1類) は球体トークンとしてまとめた。球の一部が削られ底面が作られている2A'類のものも含めた。236点の球体トークンのうち、209点はE型の2A類に属する。①径8mm前後、②径14～20mmのもの2種類に大別でき、さらに大きい27mm

程の一群も看取される (図4)。E型のトークンで、実際にエンヴェロップに封入されていた球体トークン (w20987.27とw10424) には10mm弱と20mm弱の2種類のサイズが認められる。従ってここでは、①を小型群、②を大型群としておく。ウルクでは小型群の出土頻度が高い。また、爪形文が施された2Ba2類は、10mm・14mm・15mm・17mm・21mmでありほぼ大型群に含まれる。

3類 (図2の3A類から3Cb2類) は円盤状トークンとしてまとめた。160点の3類トークンのうち、E型のトークンは3A類が86点、3Ba1類が12点である。紡錘車と見紛うものもあるが、3Bc類でも中央に穿孔のない場合がありトークンとして扱った。3類は細分されたが、Bc類などはある程度まとめることができる。全体では直径10～24mm前後のものが多く、E型はI型より小さめの傾向がある (図5)。トークンのサイズの差異は、2類のように明瞭ではない。実際にエンヴェロップに封入されている3類トークンもサイズに差がないため、ここではトークンをサイズ分けしない。

3Ba1類、3Ba1'類、3Bc1類、3Bf類の直径はそれぞれ11～23mm、15～22mm、16～24mm、13～29mmである。いずれも出土数の多い7～24mmに含まれ、刻線の本数が多くなると直径も長くなるという傾向がある。

4類 (図2の4A類から4Bd2類) は棒状トークンとしてまとめた。68点あるが、そのうち56点はE型の4A類であり、施文されているものは希少である。実際にエンヴェロップに封入されている棒状トークンのサイズの径は7mm前後で統一されている (長軸13～30mm・径7mm)。I型にはこの一群に属さない大型のものもある (図6)。

5類 (図2の5A類から5Bf類) は正四面体トークンとしてまとめた。44点中39点はE型の5A類であり、やはりここでも大半はE型である。正四面体トークンは一辺10mmのものが最多であり、大型になるにしたがい減少する (図7)。ここでも、サイズに差があるのか否か明確にできない。ただし一辺30mmを超えるものがあり、小型のもの、大型のものという区別がある可能性はある。

6類 (図2の6A類から(6'A)類) は卵形トークンとしてまとめた。6類の派生として、中央よりやや上部で刻線文を巡らせているものを6'類とする。6'類のトークンは「卵形の情報」+「刻線の情報」を持つと捉えるのではなく、「刻線を施された卵形」で一つの情報単位を持つ、つまり具象的な油壺を表すと推測されているからである (Schmandt-Besserat 1992a: 139)。形の類似性だけでこのトークンが壺を意味すると言い切れるかは検討の余地があるが、6'A類が数個まとめられて一つのエンヴェロップに封入されていた (w20987.7) ことから、少なくともこれ自体が「ある意味」を持っていたのではないかと判断する。

63点ある6類のうち、E型トークンの6A類は16点、6'A類は32点であった。

7類(図2の7A類から7Bh類)は長方形トークンとしてまとめた。全部で25点あり、13点はE型である。

8類(図2の8A類から8Ba2類)は二等辺三角形トークンとしてまとめた。全部で42点あり、そのうちE型のは6点、最も多かったのは、いくつか異なる刻線が縦に走っている8Ba1類で、29点ある。

9類(図2の9A類から9Bb1類)は26点の鎌形トークンとしてまとめた。E型の9A類は12点、9Bb1類は1点である。

10類(図2の10A類から10D(Bc2+Ca1)類)は16点の紡錘体トークンとしてまとめた。

11類(図2の11A類から11Be1類)は42点のアーチ状トークンとしてまとめた。E型の11A類は8点、11Be類・11Be1類は16点である。

12類(図2の12A類から12Ca1類)は板状楕円形トークンとしてまとめた。21点ある。板状楕円形のトークンには中央に半端な刻線があり、刻線のない無紋の板状楕円形トークンは見当たらなかった。そこで、この12類の中央に走っている刻線は3Bc1類の刻線のように、本数がトークンの意味付けとして重要な意味を持つとは異なり、意味はないのではないかと判断した。12A類自体を基本のパターンとし、それに施文することにより、別の意味を持たせたのではないかと考える。

13類(図2の13a類から13η類)は47点の具象トークンとして12類までに含まれないものをまとめた。文様等の分類基準については注を参照されたい⁸⁾。

対象遺跡のトークン

ウルク遺跡出土トークンと同タイプに属するトークンを遺跡ごとにまとめ(表1)⁹⁾、ウルク遺跡出土トークンと共通するタイプの割合¹⁰⁾を各遺跡で算出したところ次のようになる。スーサで対象としたトークンは669点になり、そのうちウルク出土トークンと同じ形状・文様に属するタイプ数は全体の62.7%にのぼる(Schmandt-Besserat 1992a, 1992b; Fueye et al. 1934; Mecquenem et al. 1943; Amiet 1972; Brun and Vallat 1978)。テロ(Tello)出土トークンは87点であり、そのうちウルクと同タイプのトークンは32.5%(Schmandt-Besserat 1992a, 1992b; Genouillac 1934)。ハブーバ・ケビーラ(Habuba Kabira)では186点のトークンのうち、ウルクと同タイプのトークンの割合は37.3%¹¹⁾(Schmandt-Besserat 1992a, 1992b)。テペ・ヤヒヤ(Tepe Yahya)のトークンは、212点のトークンのうちウルク出土トークンと同タイプに属するトークンの割合は16.9%(Schmandt-Besserat 1992a, 1992b;

Lamberg-Karlovsky 1986)。テペ・ガウラ(Tepe Gawra)は458点でウルクと共通のトークンの割合は14.5%(Schmandt-Besserat 1992a, 1992b; Tobler 1950)。テル・ブラク(Tell Brak)出土トークンで今回対象としたトークンは26点あり、そのうちウルク出土トークンとの共通タイプの割合は10.8%(Schmandt-Besserat 1992a, 1992b; Oates and Oates 1993; Emberling 1999)。チョガ・ミシュ(Chogha Mish)出土トークンは70点で、ウルク遺跡出土トークンと同じタイプの割合は10.8%(Schmandt-Besserat 1992a, 1992b)。ジェベル・アルーダ(Jebel Aruda)出土トークンで得られたデータは10点と少なく、ウルク出土トークンとの共通タイプの割合は3.6%(Schmandt-Besserat 1992a, 1992b)。ハジュネビ(Hacinebi)出土トークンは12点(Pittman 1996)でウルク出土トークンとの共通タイプの割合は3.6%。アルスランテペ(Arslantepe)出土のトークンは38点で(Frangipane 1994; Frangipane et al. 1983)4つのタイプに分類されたため、ウルク出土トークンとの共通タイプの割合は4.8%となる。

スーサ、テロ、ハブーバ・ケビーラでは、ウルクと共通するトークンが多い。この3遺跡ではトークンに共通点が多いとすでに指摘されている(Schmandt-Besserat 1992a: 71)。しかし同タイプに分類されるべきトークンがまとめられていなかったため¹²⁾、氏の算出する割合とは異なっている。改めて本稿でトークンを再整理した結果、従来どおりこれら遺跡間で、トークンのタイプの類似性を数値で表現することができた。また、3Ba類や3Bc類、6'類、8Ba類、11Ba類、11Be類など、施文方法に統一性があると考えられるトークンがこれらの遺跡から出土していることは興味深い。

その他の遺跡からはそれぞれ基本の形となるトークンが出土しており、装飾されたトークンの出土は限られている。

また、エンヴェロップに封入されているトークン(E型)とそうではないトークン(I型)で分類した結果、E型のトークンは96種類あるトークンのうち15種類だけと、限られていることが判明した。表1の網掛けの部分がそれに該当する。この大別から、各遺跡は①ウルク遺跡のようにE型のトークン以外にも様々なI型のものが出土している遺跡、②E型のものと若干のI型のものが出土している遺跡、に区分される。①の遺跡として、スーサ、テロ、ハブーバ・ケビーラがあげられ、チョガ・ミシュ、ハジュネビ、テペ・ヤヒヤ、ジェベル・アルーダ、テペ・ガウラ、テル・ブラク、アルスランテペは②の遺跡に区分できる。

各遺跡のトークンのサイズは次のようになる。

1. スーサ

1類トークンは、ウルク遺跡で設定した大小2種類のサイズの範囲にほぼおさまる。また小型の一群が多い(図3)。スーサ出土のエンヴェロップ(Sb1927)に封入されている1A類トークンは、2種類のサイズに分けられる。即ち直径7mm・高さ12mmのものが3点、直径14mm・高さ15mmのものが1点、その他同一サイズの3A類トークンが3点封入されている。このエンヴェロップの表面には、おそらく中のトークンを表現する目的で、トークンの型押痕がある。大きく深い円が一つ、小さく深い円が三つ、浅い円形が三つ型押しされていることから、底面の径7mm・高さ12mmの円錐形と底面の径14mm・高さ15mmの円錐形は、それぞれ意図的にサイズに差異を持たせて製作されたと判断してよい。この両トークンのサイズに差異があるとすれば、大型のトークンはウルクの小型群と同規格であり、小型のトークンはウルクでは確認されていないさらに小型の一群とみなせる。従ってスーサではウルクの小型群よりさらに小さい一群(底面6mm程度・高さ13mm程度)が設定できる。

2類トークンに関しては、ウルクと同様、直径9mm程度の小型群の出土頻度が高い(図4)。また、Sb1967のエンヴェロップには2種類のサイズの2A類トークンが封入されている。それらは直径13mmのものが2点、9mmのものが4点である。従って、直径13mmと9mmのわずか4mmの間に、当時の人々がサイズの異同を判別していた可能性が高い。従って9mmと13mmの間で小型のトークンと大型のトークンを分けると、この境界がウルクで設定した小型群(8mm前後)と大型群(14mm以上)の境界に共通する。さらに、2Ba2類トークンは直径13mmと15mmであり、ウルクの2Ba2類のサイズと一致する。ウルクとスーサの2Ba2類トークンは形状、文様、サイズとも一致するほぼ同一のものと言える。

3類トークンのサイズは、ウルクと同様、直径10～24mm前後のものが多く、E型はI型より小さめである(図5)。3Ba1類、3Ba1'類、3Bc1類、3Bf類の直径はそれぞれ13～22mm、22～35mm、20～22mm、11～20mmであり、これらのトークンは、形状、文様、サイズの点においてウルクの同類トークンと明らかに一致する。

E型の4類トークンのサイズは、ほぼ統一されている(図6)。若干ウルクのものより小型ではあるが、ウルクの規格内である。またウルク同様、I型の4類トークンは大きめである。

5類トークンで出土頻度が高いのは小型のものである(図7)。ウルク同様、サイズに多様性が認められ、サイズによるタイプ分けは困難である。しかし、Sb1967のエンヴェロップには3種類のサイズの5A類トークンが封入さ

れている。一辺9mmのものが4点、13mmのものが2点、23mmのものが3点である。従って、スーサではこの3種類のサイズを区別していたと考えられ、9mm前後、13～17mm、20mmあたりを境界とするタイプ分けが可能である。わずか4mm程度の差異を認識し、それらに異なる情報を持たせていたことになる。異なるサイズのトークンを数個ずつまとめることにより、相対的にサイズの差を判断していたのであろう。

2. テロ

1類トークンは、ウルクで設定した小型、大型両サイズのものが存在する。また、それより大きめのものもある(図3)。

2類トークンは、ウルク、スーサで一般的な小型サイズのものではなく、ウルクの大型群と同じ14～20mmにほとんどが含まれる(図4)。小型のものが圧倒的に多いウルクとは様相が異なる。しかし、ウルクと共通の文様を持つ2Ba2類は直径17mmと20mmであり、ウルク、スーサ、テロにおいて、形状、文様、サイズの全てが一致するトークンが認められる。

E型の3類トークンのサイズは14～42mm、I型は17mmであり、多様性が認められる(図5)。ウルクとほぼ同様の状況である。しかし、ウルクよりも大きめのものの出土数が若干多いようである。3Ba1類、3Bf類の直径はそれぞれ14・22mm、17mmであり、形状、文様、サイズの三点においてウルクと強い共通性がみられる。

5類トークンのサイズは、一辺14mmのE型のものが1点、I型は18mmのものが2点、34mmのものが1点ある。ウルクで類出の小型のものはみられず、スーサの中型のものとそれより大きなものである。

3. ハブーバ・ケビーラ

1類トークンの直径のデータのみ得られたものを含め検討した(図3)。その結果ウルクの小型群と同規格に該当することが明らかとなった。しかし、ウルクの大型群と共通するサイズのものは存在しない。

2類トークンに関しては、ウルクで一般的な小型群と同規格のものがみられない(図4)。大型のものと、さらにそれより大きい30mmのものがある。また2Ba2類の直径は、12～20mmであり、ウルクとスーサ、テロ、ハブーバ・ケビーラで形状、文様、サイズの一致するトークンがみられる。

3類トークンは、ウルクで出土頻度の高い13～25mm程のものが出土しているが、直径30mm超のものもかなりある(図5)。3Ba1類、3Ba1'類、3Bc1類、3Bf類のサイズはそれぞれ、17・18・25mm、18mm、25mm、17～

21mmである。これらのタイプはウルク、スーサ、テロ、ハブーバ・ケビラでみられ、サイズも統一されている。

4類トークンは、1点はウルクと同規格、1点は規格外である。

4. ジェベル・アルーダ

E型の3類トークンは、直径23mmのものが1点、25mmのものが2点、26mmのものが1点と統一されている。しかしウルクのE型は、10～24mm程の小型のものが一般的である。ウルクとジェベル・アルーダの3類トークンに同一サイズのものが存在しないわけではないが、比較するとジェベル・アルーダのほうが大きめである。

5. チョガ・ミシュ

1類トークンのサイズはウルクの小型群と同規格であり、極めてサイズに統一性が認められる(図3)。しかしウルクで設定された大型群はない。従ってここでは小型、大型の識別がされていたと断言できない。

2類トークンは、ウルクで一般的な小型群と一致するトークンが多く、またウルクの大型群と同規格のものもある(図4)。実際にエンヴェロップに封入されている2類トークンは、少なくとも小型、大型の2段階に分けることが可能のようだ。

E型の3類トークンの直径は13mmが2点、15mmが2点で極めて統一されている。これはウルクとスーサで最も多くみられるサイズに一致する。

5類トークンで出土数が多いのは一辺7mmのもので、スーサでの小型群に近い(図7)。スーサで設定された中型の一群と同様のサイズも確認される。

6. ハジュネビ

この遺跡からは、エンヴェロップが1点出土している。中には2種類のサイズの2A類トークンが認められる。直径10mmのものが6点、20mmのものが4点である。それぞれウルクで設定した小型群、大型群に合致する(図4)。

また、異なるタイプの3類トークンが1点ずつ封入されていた。1点は径が10mm、もう1点は径16mmの3Ba1類である。ここでもウルクと形状、施文方法、サイズの一一致するトークンが確認された。

7. テベ・ヤヒヤ

1類トークンは、ウルクの小型、大型の両群に属するものがある(図3)。しかし、ウルク規格外のものも認められる。

2類トークンはウルクの小型群、大型群と同一サイズのものがある(図4)。そしてそれより大型の30mmを超え

るものまで幅広く存在する。しかし、出土頻度の高いものは、12mm前後と25mm前後のもので、それぞれテベ・ヤヒヤでの小型群、大型群と設定すると、ウルクの規格より若干大きめのものが基準になるようだ。全体的にみてもウルクより大きめのトークンが多い。

3類トークンのサイズは、ここでも明確に差別化できない。また、ウルクと異なり大型のものがある(図5)。また、3Ba1類も35mmでありウルクのものより大きい。

4類トークンは、長軸の長さのみを考慮に入れるならば、ほぼ14～30mmでウルクと強い一致をみるが、それに該当しないトークンもある(図6)。

5類トークンのサイズは一辺15mmと44mmのものデータが得られた。4cm超のトークンはかなり大きなものである。

8. テベ・ガウラ

1類トークンのサイズはウルクと一致するものもあるが、Eタイプの1類トークンはウルクのものと同じサイズが一致せず、長軸方向に長い形状をしている(図3)。

2類トークンは、ウルクで最も出土数の多い小型のものよりやや大きめの13mmのもの、20mm前後のものが中心となる(図4)。小型、大型の区別は看取されるが、ウルクの小型群と大型群の規格には該当しない。

3類トークンは、ほぼウルクと同一規格である(図5)。しかし出土頻度から考えるとジェベル・アルーダのように若干大きめのものが一般的であり、かなり大型のものもある。

4類トークンはウルクより大きめのものが目立ち、共通点は見出せない(図6)。

5類トークンは、一辺16mm、20mm、23mmのものが1点ずつ確認されている。ウルクやスーサでは小型のものが一般的であるが、ここではみられない。

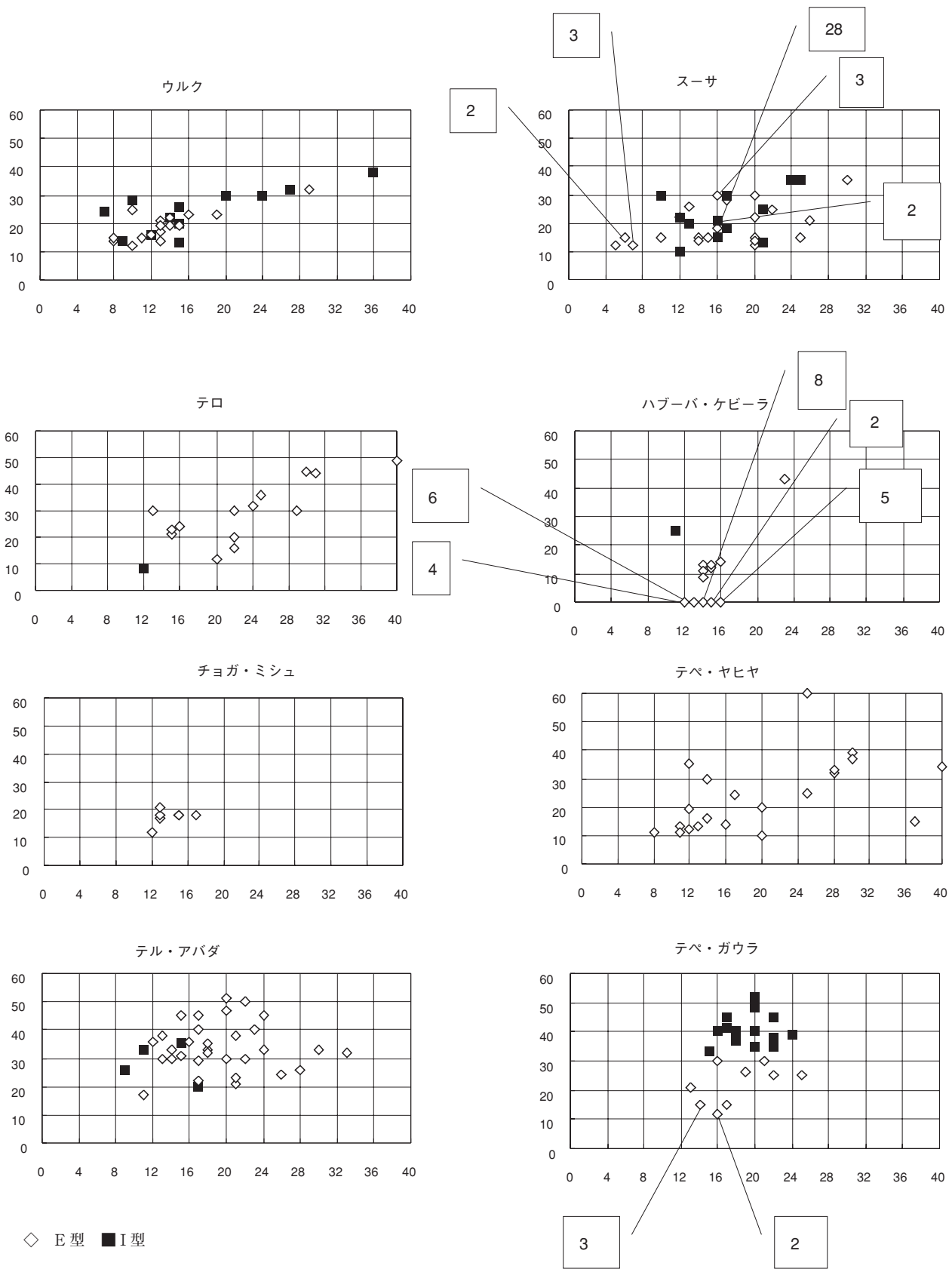
9. テル・ブラク

1類トークンでサイズのデータが得られたものは次の3点である。底面の径10mm・高さ20mm、底面の径12mm・高さ14mm、底面の径17mm・高さ20mmであり、ウルクの小型群と同規格である。

2類トークンはウルクの小型群と大型群のものがある(図4)、小型のものが多いというウルクの傾向とは異なる。

3類トークンは、17mm、18mmのものがそれぞれ1点、19mmのものが2点あり、ほぼ同一サイズで統一されている。全てウルクと同規格である。

4類トークンでデータが得られたのは径8mm・長軸31mmのもので、ウルクの規格と共通する。



横軸 底面の径 (mm) 縦軸 高さ (mm)

グラフ中の□内の数字は、同一サイズのものの個数。例えば、スーサでは底面16mm、高さ18mmのものが28点出土している。

図3 1類トークン（円錐形トークン）のサイズ

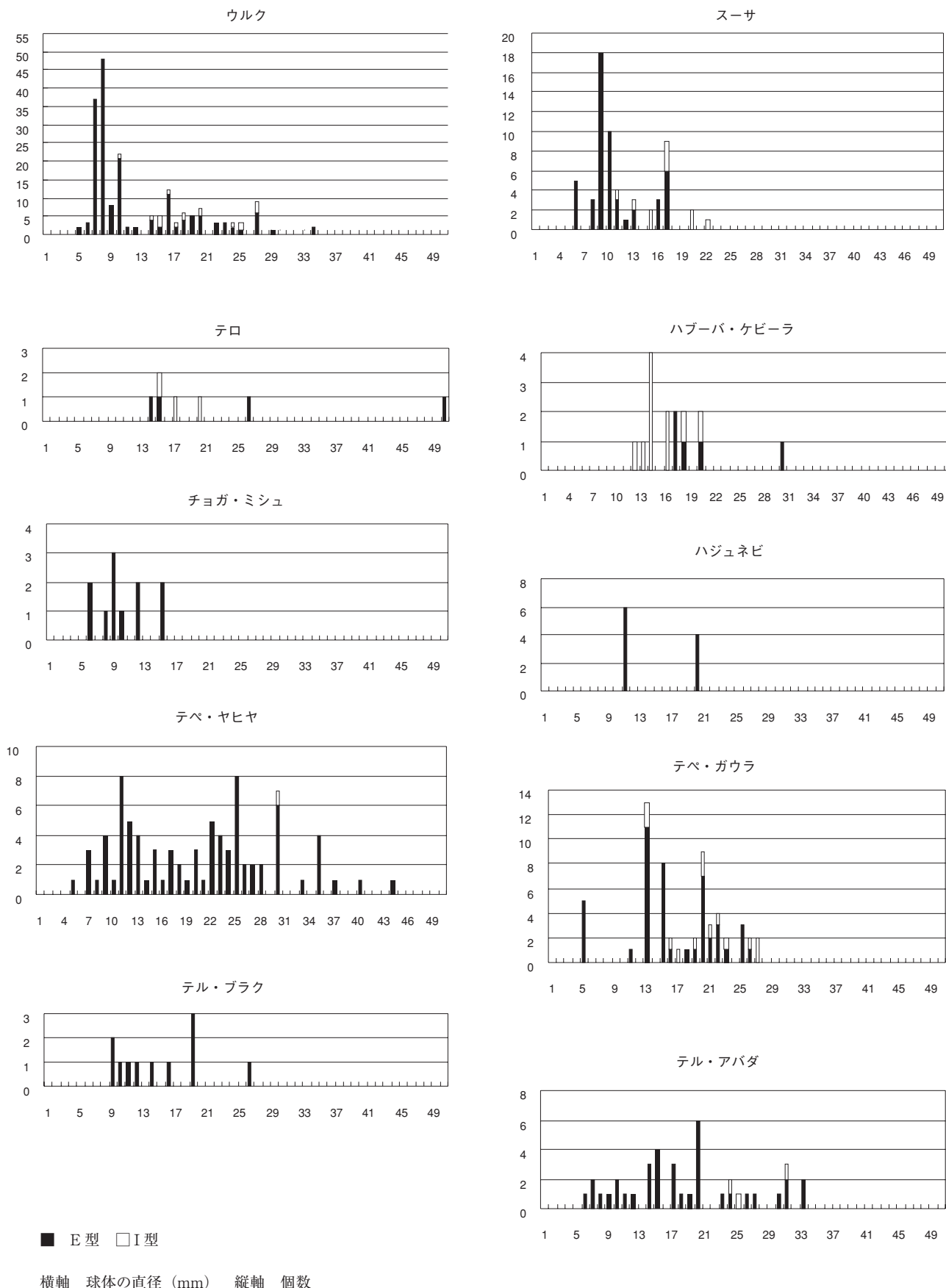


図4 2類トークン（球体トークン）のサイズ

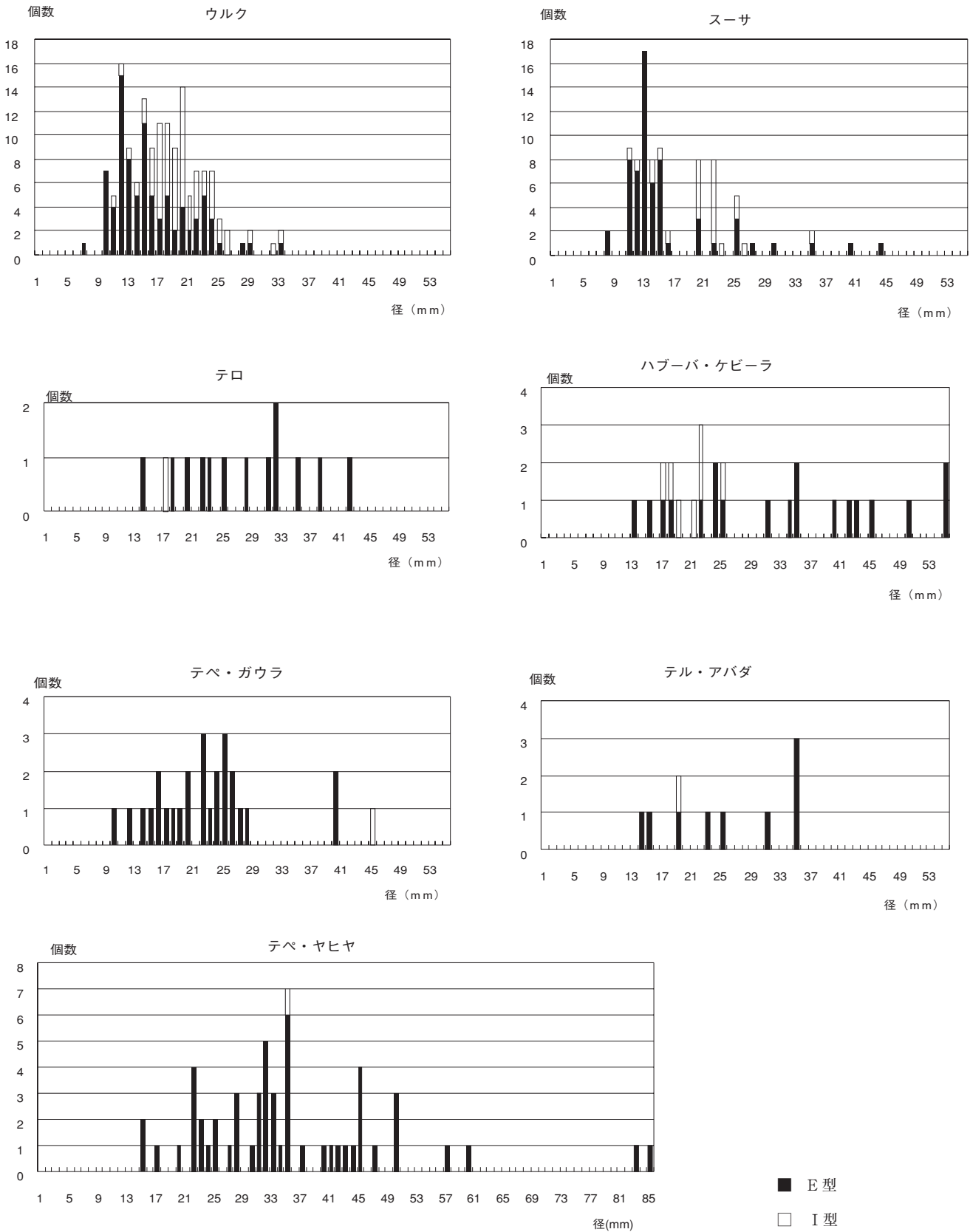


図5 3類トークン（円盤状トークン）のサイズ

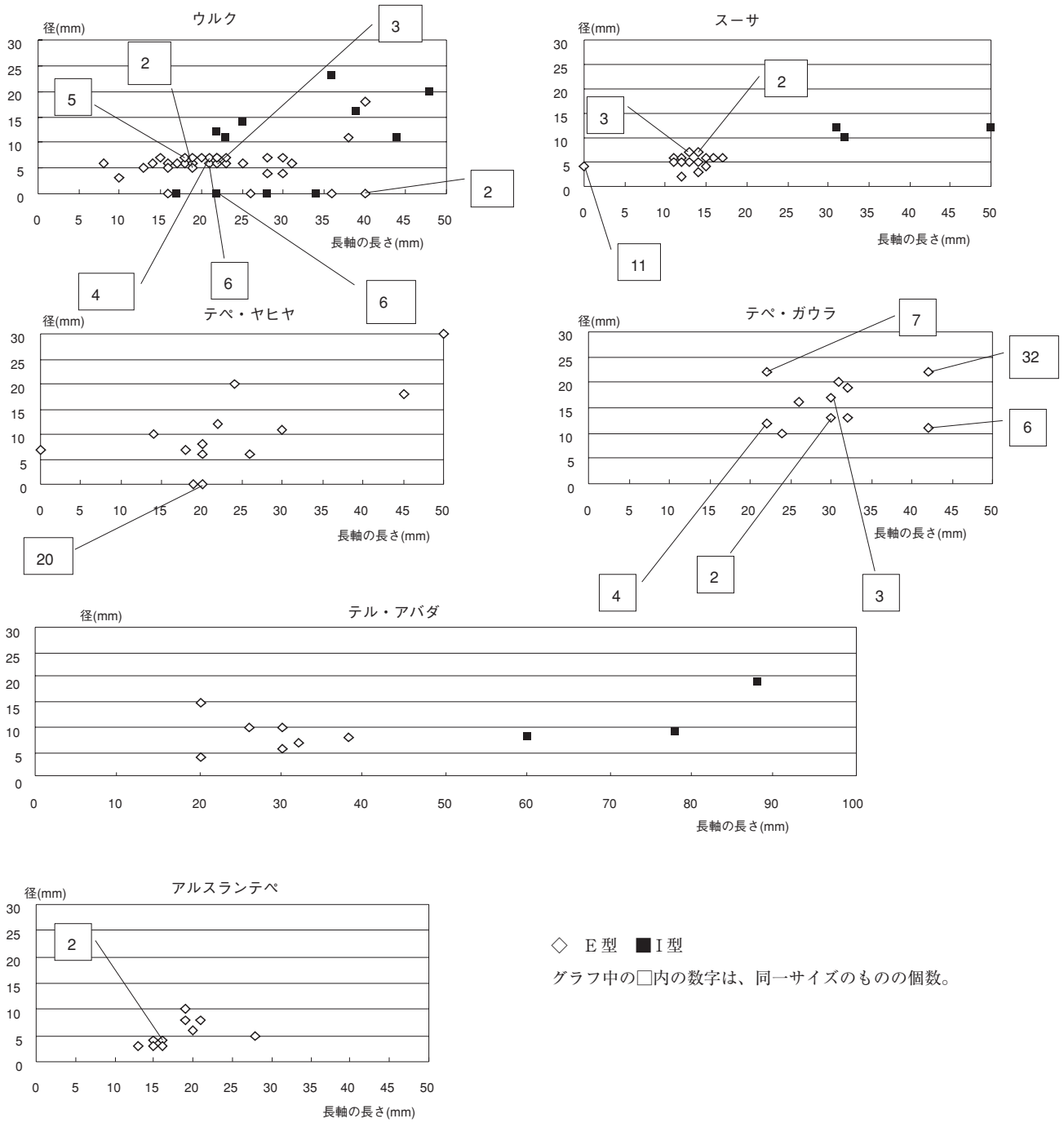


図6 4類トークン（棒状トークン）のサイズ

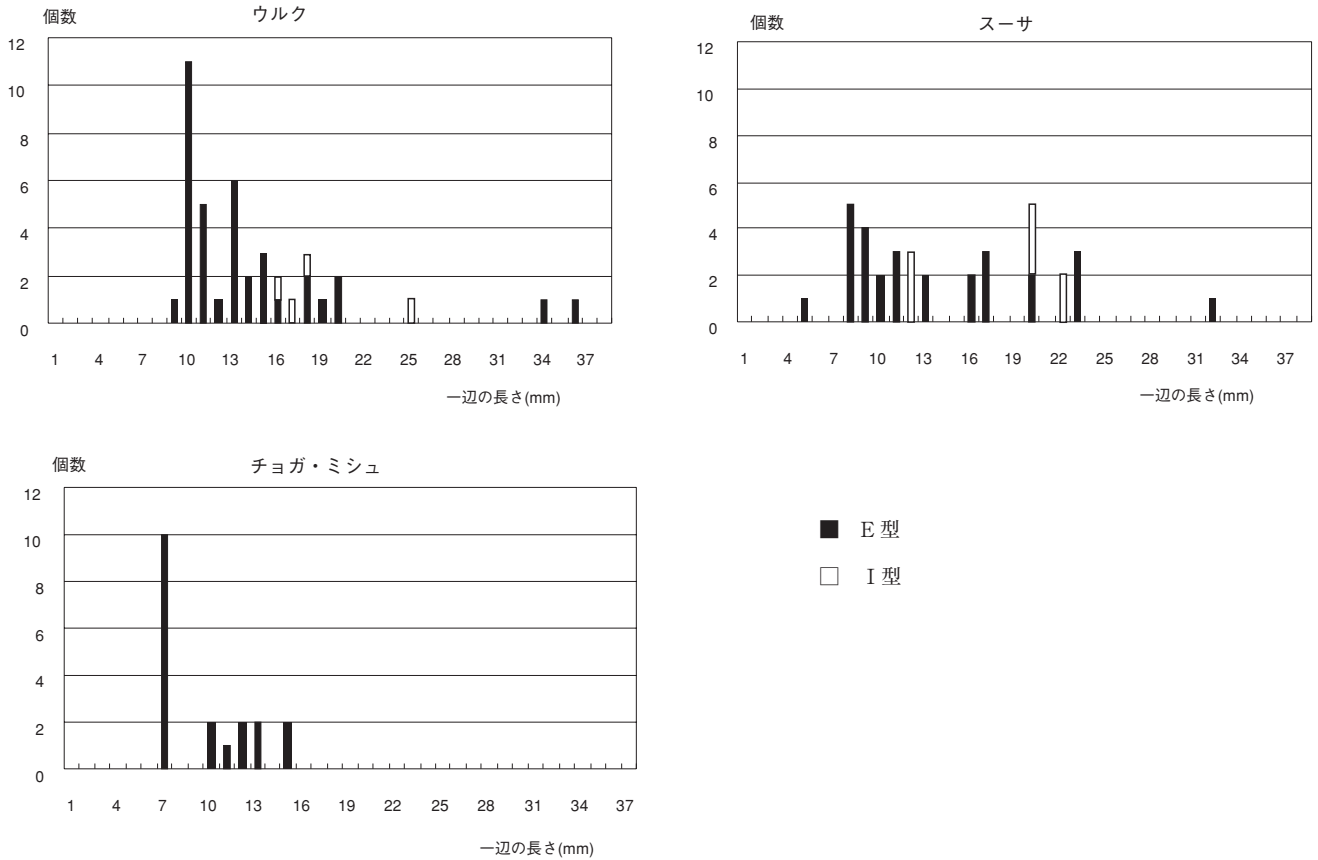


図7 5類トークン（正四面体トークン）のサイズ

10. アルスランテペ

3類トークンはその直径が35mmとかなり大きく、ウルクと同規格であるとは言い難い。しかし、4類トークンのサイズはほぼウルクのE型の4類トークンと一致する(図6)。

ウバイド期のトークン

ウバイド期のトークン使用の様相がよくわかる例として、テル・アバダ遺跡が挙げられる。トークンは、ガウラXIX-XVII併行期に該当するII層とI層のBuilding Aより出土した。これは建物群のなかで最大規模であり、控え壁を持つ外壁によって囲まれていることから、集落の中心的な役割を担っていたと考えられている(Jasim 1983)。T字形中央広間の両側には、貯蔵室が附随している。西側の小部屋からはトークンを入れた土器が、東側の小部屋からは貯蔵用と思われる土器が出土している(Jasim and Oates 1986)。トークンは4~16個でまとめられ様々なタイプの土器の中に収められていた。このまとめ方は、エンヴェロップへ封入されるトークンの組み合わせと非常に類似している。例えば、球体トークン3点、円錐形トークン2点、円盤状トークン1点が収められた小型壺が出土している。

これらのトークンには、規則を基に製作された可能性のあるものがある。例えば、球体の一部を削り底面を作った形状に刻線文が施された2A'(Ba2)類が存在する。テル・アバダの場合その刻線数は1本、4本、5本である。これはトークンの形状のみから判断すると、のちのスーサやテロでも出土する。しかし全体を概観すると、ほぼE型のものばかりで、ウルクなどでみられるI型は若干存在するのみである。

1類トークンのサイズについては、ウルク期のトークンと大きく異なる(図3)。テル・アバダのトークンは、底面の直径に対して高さの高いものが多い。円錐形を呈している、ウルク期の円錐形トークンとは異なる形状と判断できる。

2類トークンのサイズは全てウルクにみられるサイズと一致する(図4)。ウルクでは直径6~37mm、テル・アバダでは6~33mmのものが存在するのだ。しかしここではウルクで頻出する小型群(8mm前後)より、大型群(20mm)に帰属するものが一般的である。図から判断すると10mm前後のもの、15~20mmのもの、20~30mmの3種にサイズが分けられる可能性はある。

3類トークンは、ウルクのものと同じサイズのものもあるが、大きめのものが多い(図5)。3Ba1類の直径は

25mm と 31mm である。ウルク、スーサ、テロ、ハブーバ・ケビーラの 3Ba1 類のサイズは 20mm 前後で統一されており、それらと比較すると 10mm 程大きいものもある。

4 類トークンは、ウルクで設定される規格よりかなり大きい (図 6)。面上に文様が描かれているものに至っては、他には例がない程の大きさである。

トークンからみる各遺跡の位置付け

スーサ、ハブーバ・ケビーラ、テロ出土のトークンとウルク出土トークンとでは、概ね近似した様相を呈する。厳格な規則に則り製作されたと思われるトークンがこれらの遺跡から出土している。特にスーサとウルクとでは一致するタイプ数が圧倒的に多く、サイズの規格も一致していた。これらの地域間では、互いの地で製作されたトークンの意味を容易に認識できたと推測される。テロとハブーバ・ケビーラでは、規格面でスーサ程ウルクと近似するわけではないが、共通点も多く認められる。南メソポタミアとタブカ地方、スシアナ地方の間に強い交流関係が垣間見える。

チョガ・ミシュとハジュネビは「E 型が出土する遺跡」と言える。筆者が把握しうる両遺跡のトークンが全てエンヴェロップに封入されているものであるため¹³⁾、タイプの構成から判断するとテル・ブラクなどと構成が近いという結論に至る。

しかし、チョガ・ミシュやハジュネビ出土トークンのサイズはウルクのものとは完全に一致する。ハジュネビ出土のエンヴェロップには 2 種類のサイズの球体トークンが数個ずつ封入されている。故に、サイズの異なるトークンに異なる情報を含ませるということをハジュネビの人々が認識していたことは想像に難くない。しかもそのような認識のみばかりか、トークンのサイズ自体がウルクやスーサと一致していたと考えられる。エンヴェロップのつくりも南メソポタミア様式と言え。形状は球に近く、面上に 2 種類の異なった円筒印章の印影がみられる。印影の施し方はチョガ・ミシュ遺跡のものとは類似していることが指摘されている (Pittman 1996: 231)。図像はネコ科とウシ科の動物の行列、戦士の行列とイナンナ神殿と機織りする女性の 2 種類であり、明らかに南メソポタミア様式である。

エンヴェロップはその中のトークンとともに他地域から搬入された可能性があるため、製作地はハジュネビに限定されない。しかし、トークンから情報を読み取ることが可能だったことを考えると、これらの地が南メソポタミアと共通の情報ネットワーク¹⁴⁾に参入していた可能性がより高まる。

これらの地域間で実際にトークン自体を交換していたか否かは判断できないが、十分な互換性は想定できる。従ってこれらの地域では、広範囲で通用するトークンを用いて

物資管理を行っていたと言えよう。このようなトークンシステムを、広域型トークンシステムと呼ぶことにする。極めて統一性の高い広域型トークンシステムを活用していたウルク、スーサ、ハブーバ・ケビーラ、テロと、そこまでの規制はないが広域型トークンシステムを利用していたチョガ・ミシュ、ハジュネビに区分できる。

では、ハジュネビ同様、エンヴェロップを出土するテペ・ヤヒヤでも、ウルクと共通規格のトークンが使用されていたのであろうか。テペ・ヤヒヤ出土トークンは、ほぼ E 型から構成されており、ハジュネビと共通する。しかし、エンヴェロップを出土する遺跡であるにも関わらず、サイズの規格がウルクのものとは一致すると断言できない。円錐形トークンと棒状トークンの規格はウルクのものに近似するが、球体トークンと円盤状トークンの規格に類似点はない。

トークンのサイズは、ウルクやスーサ、チョガ・ミシュやハジュネビでは統制がとれていた。エンヴェロップに封入される際にサイズが決定された可能性が考えられる。10cm 前後のエンヴェロップに封入するためには、トークンのサイズも自然に統一されるであろう。従ってエンヴェロップを使用する人々の間ではサイズの規格が統一されていたのではないかと推測された。

ただしテペ・ヤヒヤの例から、エンヴェロップを使用する人々の間で必ずしもトークンのサイズが統一されていたわけではない、とも言える。テペ・ヤヒヤのエンヴェロップには球体トークンが 2 点、円錐形トークンが 1 点封入されており、球体トークンは 2 点とも同一サイズである。従って集落内では、トークンのサイズが統一されていたと推測できる。テペ・ヤヒヤでは同タイプのトークンの規格を統一させてはいたが、個々の規格の設定はこの地域独自で行われ、ウルクやスーサのトークンと一致させていないと結論づけられる。

テペ・ガウラ、テル・ブラク、アルスランテペは「E 型が出土する遺跡」と言える。サイズの規格は、ウルクと統一されていたとは言い難い。

テペ・ガウラからはウバイド期からウルク期まで継続してトークンが出土する (Schmandt-Besserat 1992b)。ウバイド期のものには、被葬者が有力者と目される墓から出土している例もみられる。シュマン・ベセラはこのことから、トークンがステータスシンボルであったと考える。集落の有力者が物資管理を司り、死後その権威の誇示を目的として、普段から愛用していた品が副葬されたと主張する (Schmandt-Besserat 1992a: 101-107)。しかし、これら副葬品は、ウルクのトークンとサイズの規格が合致せず、また、石製でよく磨かれているなどの特徴があることから、カウンターと想定されるウルクのトークンとは用途が異なる

っていた可能性がある。少なくともそれらが持つ情報単位が合致していたとは言い難い。副葬品へと転化したとされるトークンは根本的にウルク期のトークンとは異なるのではないだろうか。

ウルク期になってもE型のものが主なものであり、サイズの規格がウルクのトークンと一致しない。仮にテベ・ガウラ出土のウルク期の幾何学形小型製品がカウンターとして機能していたとしてもウルクのトークンと互換性がある確率は低い。ここで扱った遺物がウルク・エクспанションの初期段階であるウルク中期初頭のものであるため、ウルク文化の強い影響はなかったであろう。従ってここでは独自にトークンを製作し、ウルクを中心としたトークンを介した情報ネットワークには含まれていなかった可能性がある。

テル・ブラクのトークンもE型に含まれるものがほとんどである。穿孔の施し方はウルク遺跡のものと同通する。しかしこれらには、石製でよく磨かれて整形されるものも多い。ウルクのトークンは一定期間が過ぎれば廃棄されるためか、粘土で簡単に製作され、丁寧な作りのものは少ない。これらのトークンもまた、ウルクのトークンと互換性のあるものではなく、地域独自に製作されたものと判断する。従ってそのトークンシステムはウルク文化のシステムに組み込まれていないと考える。

アルスランテベのトークンは、ジェムデット・ナスル期初頭に該当するVI B期に帰属する。石製の棒状トークンが11点、アーチ状トークンの小型サイズのものが11点、大型サイズのものが11点、円盤状トークンが1点、まとめられていた。これらは、一般的なトークンにある形状を呈していること、同じ形状のものが数点ずつまとめられていたことから、カウンターである可能性もある。アーチ状トークンには2種類のサイズのものがあり、サイズの差異から情報単位の相違を生み出す手法がここでも通用していた可能性が高い。しかし、テル・ブラク同様、これらが一般にみられない石製品であることから、例えカウンターとして機能していたとしても、ウルク文化の影響によるものではないと考えられる。

ジェベル・アルーダでは、トークン出土数が少ないため判断が難しいが、この遺跡も「E型が出土する遺跡」と言える。ただし12Ca1類のような南メソポタミア特有のトークンもみられる。つまり、厳格な規則に則り製作されたものである。筆者の観察から、トークンの施文方法として、面全体に施される刺突文以外は、刺突の数が6つ施されることが多い。その施し方も縦3列、横に2列施すという規則が認められる。12Ca1類もその習慣を踏襲しており、この施文方法はジェベル・アルーダ以外ではウルク、スーサ、テロで確認されている。このことから、ウルクやスーサと

共通するタイプが今後確認される可能性はある。ただし、現状ではトークンを介した情報ネットワークに参入していたとは言い難い。

広域型トークンシステムの広がり地域型トークンシステム

紀元前8千年紀以降、トークンが同様の情報を持ち続けながら連綿と受け継がれてきたというシュマン・ベセラの主張には賛成しかねる。しかし、ウバイド期においても幾何学形小型製品の用途をカウンターと想定できる場合がみられる(Jasim and Oates 1986: 352-357)。ウバイド期のトークンが、のちのウルク期のトークンと同様の情報単位を持つとは考えにくい。実際に、それらは、ウルク期のトークンのように幾何学形を呈していながら、サイズはウルク期のものとは異なっていた。しかしその使用方法はウルク期に類似する点がある。異なる形状のトークンが数個ずつまとめられていたこと、一定期間保存されていたこと、物資管理と関係していた可能性が高いこと、集落内の重要な建物から出土することなどである。さらにテル・サビ・アビヤド(Tell Sabi Abyad)の例から、カウンターとしての機能を果たしていたトークンは新石器時代に遡る可能性がある(常木 1995)。従ってウルク期以前から、幾何学形小型製品をカウンターとして用い物資管理に役立てる習慣があったと考えられる。スタンプ印章や封泥がウバイド期前後から多用されるようになるのも、当時物資管理に役立てるための道具の開発が盛んになる過程であったからであろう。

ウルク後期になり、南メソポタミアではトークンのタイプ数が激増し、それと同様のものを受け入れる地域があった。これらの地域間には、広域型トークンシステムが機能していたと言える。一方で、以前の習慣を踏襲する形でトークンを物資管理の道具として用い続けていた地があった。それらのトークンは、ウルク文化の影響によりもたらされたのではなく、その製作は伝統的に各地域独自に行われていたと考えられる。さらに物資管理の道具を南メソポタミアと統一する必要がなかったということは、これらの地域ではトークンをウルク間との取り引きに用いるのではなく、地域内あるいは集落内のみでの物資管理が主眼に置かれ、その中でトークンを用いたのであろう。従ってこのような物資管理法を地域型トークンシステムと呼ぶことにする。

人と物と情報

ウルク・ワールドシステム論では、紀元前4千年紀後半の西アジアの文化的中心は南メソポタミアにあると言われている(Algaze 1993)。該期にウルクがトークン使用の中心であったことは、そのタイプ数や出土数が圧倒的に多い

ことから容易に想像できる。

スシアナ平原に位置するスーサはウバイド期から南メソポタミアと接触を持ちつつも独自の文化を形成していた (Lamberg-Karlovsky 1996: 108)。しかし、南メソポタミアでウルク文化が隆盛する頃、ウルク様式の土器セット・住居プラン・建築資材・物資管理の道具が突然出現する。トークンが多用されるのも 18 層頃からで、ウルクではすでにトークン使用がかなり進行している時期である。粘土板文書から、南メソポタミアではプロト・シュメール語が、スーサではプロト・エラム語が使用されていたことがうかがえるので、両者は言語を異にする集団であったと判断できる。それにもかかわらず両者が同一の物質文化を共有するということは、そこに単なる交流以上の力が働いたと想定できる。ウルクやスーサ出土のエンヴェロップやブツラ上の図像には、捕虜や戦士の行列が多用され戦闘が頻繁にあったと想像できる。スーサ出土トークンはウルクの影響を十分に受けており、一般に言われているように植民という状況をも想定できる重要な資料である。

スーサ同様スシアナ平原のセンターであったチョガ・ミシュからも、ウルク様式の土器セット・装飾用コーンなどが出土しており、封泥に残された印影も南メソポタミア様式である。ここでもウルク文化受容期にセトルメントパターンが変化し、スシアナ平原の集落規模は 3 倍になると言われる。スーサ同様、南メソポタミア人による植民地化が指摘されている (Algaze 1993)。本稿の分析から、この地でも広域型トークンシステムを採用していることが解明されたが、スーサとはトークンの出土数や種類の幅が少ない点が異なっている。

ハブーバ・ケビーラでも、ウルク式土器のセットが大量に出土し、ルームヘンレンガはウルクとハブーバ・ケビーラで共通している。神殿や住居プランもウルクと類似し、計画的な都市づくりが確認されている (小泉 2000: 160)。それ以前に人の存在を示す考古学的物証はなく、南メソポタミア人がアナトリアなどからの資源調達の中継や前哨地の経営のため入植したとされている (Algaze 1993)。いずれにせよ、トークンの分析からもこのことを裏付ける結果となった。

ハブーバ・ケビーラ遺跡隣接のジェベル・アルーダからもウルク式土器がセットで出土し、ウルク様式の住居プランが検出されている (van Driel et al. 1979)。また、粘土板上の図像も明らかに南メソポタミア様式である (van Driel 1982: 20)。ここでは物資管理もウルクと同様の方法で行われていることは想像に難しくなく、ハブーバ・ケビーラ同様ユーフラテス川中流域の包領地とされている。しかし、トークンの分析からでは従来考えられている入植という状況を補足することはできなかった。ただし先にも述べ

たように、I2Ca1 類のような南メソポタミア特有のトークンもみられる。今後の発掘成果の報告に期待したい。

ハジュネビ出土のウルク初期から中期にかけての土器は、銅石器時代後期の Amuq F のものである。ウルク中期以降、Amuq G の土器とウルク式土器が出土することから、ハジュネビはこの時期にウルク文化の影響を受け始めると考えられる (Stein and Misir 1994: 154-158)。ウルク文化の影響がみられる時期、マウンドの北東部から円筒印章・ウルク式土器セット・装飾用コーン・瀝青とともに、トークンが出土している。一方、南側や西側ではスタンプ印章やスサ混和土器など、アナトリア銅石器時代後期の物質文化のみがみられる。また両地区の獣骨の分析研究から、北東部に居住した人々は南メソポタミア同様ヒツジを主な食料源としており、南側に居住した人々はウシやブタを食する傾向が強いと言われている (Lamberg-Karlovsky 1996: 83)。従ってハジュネビは、少数の南メソポタミア人が在り住人の集落へ入植した地であり、彼等は数十 m の距離を置いて良好な関係を保ちながら住み分けをしていたと言う (Stein 2000: 19)。筆者の分析から、集落北東部の人々は広域型トークンシステムを採用しており、南メソポタミアの情報ネットワークに参入していると考えられる。ただし、スーサやハブーバ・ケビーラ程大量で幅のある情報交換がされていたわけではない。スーサにおいて想定されるような大規模な植民活動とは異なる形で、ウルク文化の影響がみられる例と言える。

テペ・ヤヒヤには、ウルク期に少人数のエラム人が移住したと想定されている。彼等は住居を壁で囲み、在り住人と住み分けをしていた (Lamberg-Karlovsky 1996: 113)。アルガーゼは彼等が銅鉱山開発を目的にここへ移住してきたとしている (Algaze 1993: 70)。出土するプロト・エラム語の粘土板文書研究から、ここで取り扱われる物資の量はスーサやウルクより少ないことが明らかとなった。例えばヒツジの取り扱い量は 2 ~ 37 頭、ピールの支払い量は 0.6 l である。さらに石材や木材、鉱物資源の開発に関する記述が一切ない。従ってこれらは地方の生産物を扱う際に記されたものであり、エラム人は資源開発を目的としてテペ・ヤヒヤに入植したわけではないと結論づけられた (Lamberg-Karlovsky 1996: 119-125)。

トークンから判断すると、ここでは地域型トークンシステムを採用しているといえる。広域間での取り引きにトークンが使用されたのではなく、集落内或いは地域内での物資管理が目的であったのであろう。これは粘土板研究の成果と一致し、ウルク・ワールドシステム論で言われるような広域間の交易のために開発された土地としての位置付けは、本稿の分析からは想定されない。

テペ・ガウラではウルク中期初頭の LC4 期に該当する

VIIC/B 期頃に、ウルク文化との接触があると言われる。しかし、その影響は小さい。ロスマンによると、テベ・ガウラでは、ウルク・エクспанション以前から社会の複雑化がある程度進行しており、社会構造の変化は南メソポタミアとの接触によるものではなく、中心人物が互いに競合する中で生じたとされる (Rothman et al. 2000: 112-114)。ウバイド期からウルク期にかけてのトークンのタイプには、変化はみられず、サイズの規格がウルクと統一されることもなかった。ここで扱った遺物がウルク・エクспанション初期のウルク中期初頭のものであること、また独自の文化の保持が顕著であったことの表れであろう。

テル・ブラクは、ウバイド期からジャグジャグ川流域の拠点集落である。ウルク後期の眼の神殿は高いプラットホームを持ちコンモザイクで装飾されており、ウルク様式の建築物と類似すると言われてきた。ただし主室の両脇に配された貯蔵室がかなり細分されているなど、ウルク様式の建築物と若干異なる要素もみられる (常木 1997: 115)。粘土板やトークンはこの建物に隣接する CH 区から出土している (Oates 1982b)。眼の神殿にみられる装飾はウルク文化の影響を受けたものである。しかしこの地域独特の目の偶像や、動物の描かれた粘土板の存在から (Finkel 1985)、この地ではウバイド期から南メソポタミアの影響を受けつつも独自の文化を維持していたと言える (Oates 1982a)。本稿のトークンの分析では、テル・ブラクは地域型トークンシステムを採用している。南メソポタミア人と接触しながらも地域の拠点的な役割を果たしていたという従来の説を裏付ける結果である。

アルスランテベは地域の中心的集落であり、独特の文化を持っていた。例えば、祭壇前には、アナトリア地方に特有の、かなり特殊な器形をした脚台付鉢が必ず配置される (Frangipane 1997: 57)。儀礼の際に最重視される器がこの地方特有のものであることから、少なくとも南メソポタミアとは異なった宗教儀式が行われていたと考えられる。

さらに物資管理のための道具は、トークン中心ではないようである。該期には、大量のスタンプ印章やブツラ、封泥片が廃棄されているので、相当量の物資が集積され、これらの道具を用いた物資管理が行われていたのは間違いない。集積された物資を一定期間貯蔵部屋で保管する際、容器に封泥をし、印章を押す。貯蔵部屋を保護するためドアへも封泥する。その後、内容物を分配し容器から外された封泥片は、まず保護していた容器の近くに一定期間置かれ、その後貯蔵部屋の所定の場所へ移され、さらに期間が過ぎると廃棄される、という仕組みが確立しており、これは文字を持たない社会の中での記録の役割を担っていた (Frangipane 1994)。

アルスランテベ出土トークンはジェムデット・ナスル期

初頭に該当する。この時期ウルクでは絵文字粘土板が出現している。ウルクにおいてトークンの重要性が薄れる中、広域型トークンシステムをウルクから新たに導入し、南メソポタミア式の物資管理法を採用するとは考え難い。伝統的な物資管理法がすでに確立され、円筒印章やトークンを用いた南メソポタミア式の物資管理を導入する必要がなかったのではないだろうか。

おわりに

ウルク・エクспанションの影響はそれぞれ異なった形で表れ、それぞれの地域間の関係は「中心」と「周辺」の概念では捉えきれないと近年盛んに言われている。本稿ではウルクで物資管理に使用されていたトークンと西アジアに分布するトークンとの互換性の有無から、各地のウルク文化受容の度合いを考察した。その結果、トークンによる物資管理システムにおいても、広域型と地域型に代表されるような多様な様態が存在することが判明した。例えば、スーサやハブーバ・ケビーラでは、ウルクのトークンと同様のものを使用していたと解明された。従って南メソポタミア人の存在が十分に考えられる。さらに少人数の南メソポタミア人が移住してきたと言われているハジュネビのトークンも、ウルクのトークンと互換性があると判断され、このような地域間では南メソポタミアを中心とする広域型トークンシステムが機能していたと言える。

前川は「文字記録システムが、遠隔地交易・輸送などの必要のために生まれたのではなく、ウルクの大公共組織自体の日常的な管理・運営のために発明されたことを示唆している。」と述べている (前川 2001: 6)。トークンが絵文字粘土板同様、集落内の日常的な管理に用いられていたなら、これらの地域間の結びつきはさらに強調されよう。直接その製作技術が人と共に伝わった可能性が高いと考えられるからだ。

しかし、上述した地域以外のトークンは、直接的な南メソポタミア人の存在を示すものではない。テベ・ヤヒヤの例から、それらがカウンターとして使用されていても、それはウルク文化の影響によるのではなく、従来各地方で機能していた伝統的な物資管理法の踏襲の証しと想定される。大規模な長距離交易のためにトークンを使用していたのではなく、地域内での物資管理のために使用していたであろう。則ち、これらの地では地域型トークンシステムが機能していたと言える。さらに、アルスランテベでは、トークンを必要としない物資管理法が確立されていたと考えられるし、テベ・ガウラでは、トークンと類似する小型幾何学形製品は多数出土しているが、それら全てがカウンターとして機能していたわけではない可能性をはらんでいる。

紀元前4千年紀後半の南メソポタミアでは、複雑化する社会を維持するため行政に関わるシステム作りを発達させていく過程がたどれる。土器新石器時代から西アジア各地で継承されてきた地域型トークンシステムの更なる改良を通じ、広域型トークンシステムが構築される。それは南メソポタミア社会を支える重要な装置として、限定された地域において採用されることとなる。広域型トークンシステムを採用する地域間に、トークンを媒体とした情報ネットワークを想定することも可能である。しかし、この情報ネットワークの形成要因が交易活動であったか否かは解明されず、今後の課題である。一方、ウルク・ワールドシステム論で周縁とされる地は文化の独自性を有しており、必ずしも南メソポタミアを支える情報ネットワークに参入していたわけではない。それでもなおトークンとは別のウルク様式遺物の拡がりや広範囲に分布をみせることを考えると、当時、人の直接的な移動による自由な情報交換が頻繁に行われ、地域間の人々の交流は非常に活発であった様子が垣間見えるのである。

註

- 1) これらの遺物はアミエによりカルクリ (calculi) と呼ばれ、物を数える道具 (カウンター) であると評価された。本稿では、シュマン・ベセラによるトークンという名称で統一する。また、全てのトークン及びそれに類似する小型幾何学形製品の機能を個別に判断することが困難であるため、シュマン・ベセラがまとめているトークン (Schmandt-Besserat 1992b) と同形の小型幾何学形製品もトークンとして扱った。
 - 2) 本稿では個々のトークンが持つ意味を情報単位と呼ぶ。
 - 3) 本稿では、トークンシステムを「トークンを用いて物資管理を行う制度」という意味で用いる。
 - 4) アミエは、スーサ出土のブッラの表面に捺印されている印影の図像に精通しており、それらから、当時の経済活動について想定を立てている。拠点集落であるスーサとその周辺の村落では、物資の輸送をスムーズに行うための操作がなされ、簿記の必要性が高まったと考え、それに関わる道具としてトークンやブッラを想定した。現在まで続く、ブッラやトークンの使用方法についての見解はほぼこの頃に固まったと考えてよい。アミエは、具体的にトークンの用途を次のように考えた (Amiet 1966)。ブッラに封入されたトークンは、ビー玉、正四面体、円錐、円板、棒の形状をしており、これらは特定の消費物資に対応する形である。1 や 10、100 といった具体的な数字を表し、ある消費物質の合計数を具体化するためブッラに収められていた。またその他、ブッラの表面上に見られる印影は公的な保証をあらわしていること、次第にブッラの表面にトークンで刻み目をつけるようになり、中身を見ずに識別が可能になったこと、もし会計に問題が生じた時には、ブッラを壊して中身を確認すればよかったこと、トークンは保管のために特別な施設へ発送されたこと、より具体的な事象を表現することへの書記官の欲求から、次第に絵文字システムが誕生していくこと、を考察した。アミエにより、トークンの用途及び絵文字粘土板への発展過程の基礎的な見解が提示され、それが今日まで基本的に受け入れられている。
- 一方、ヴァラやニッセンも、それぞれスーサやウルク出土のトークン、ブッラ、数字粘土板、絵文字粘土板の関係を説明している (Vallat 1980; Nissen 1986)。
- 5) 例えば、約 1440 l の穀物の量を大型の円形刺突文で表現し、その一割の量は小型の円形刺突文で表現する。
 - 6) ここでいう規則とは、図2の3Ba1類、3Bc1類、6'Ba1類、8Ba1類などの刻線文の施し方にみられるものである。刻線の本数は異なっているが、その文様の施し方に明らかにある意志が働いていると推測される。これらのトークンを見て情報単位を認識する時には、刻線文の本数を数えて違いを読み取っていたに違いない。例えば3Ba1類は円盤上に刻線文を施すものであるが、刻線の本数は1~10本まで多様であり、互いを区別するためにはその本数を数える必要があったと筆者は考える。
 - 7) 統計は、広範囲で使用されている1~5類を対象にした。また特殊な形状のものや、規則性の高い文様が施されているタイプ(2Ba2類、3Ba1類、3Ba1'類、3Bc1類、3Bf類)のサイズも個別に検討した。
 - 8) 分類記号で頭の数字部分は形状を表し、それ以降の英字及び数字の組み合わせは文様等で細分した。A類…それぞれの類型で基本となるもの。無文のものが多く、6'類と12類に関しては刻線文つきの形状を基本パターンとする。B類…刻線文のみ施されているもの。各立体の上下方向を決定した際、それに対して垂直方向に刻線が引かれているものをBa類とする。Ba1類のように直線が面上の端から端まで完遂せず、面上の一部に施文されているものはBa2類とする。各立体の上下方向に対し平行方向に刻線があるものをBb類とする。面全体に施文されているものをBb1類、面の一部に施文されているものをBb2類とする。Ba類とBb類における、垂直、平行方向は主観的になりがちであるが、本稿では両者を差別化する方法として採用した。Bc類はBa類・Bb類両方向の直線が引かれているもの。両方向の直線が交差しないものをBc1類、交差するものをBc2類とする。Bd類は各立体の長軸に対して斜めに刻線文が施されているもの。斜線のみものをBd1類、格子状のものをBd2類とする。Be類は刻線文で囲まれた部分に文様を施すもの。これと近い施文方法で、平面を刻線文で分割しその区画内に文様を施すものをBe'類とする。Be'1類、Be'2類もそれぞれ区画内の文様が刻線文か刺突文に近いもので区別する。Bf類はBc2類に含まれるが、十字文として抽出する。刻線文2本を情報単位とみなすのではなく、十字文を1つの情報単位とみなす方が妥当だと考えるからである。Bg類は漢字の米に近い文様で、Bf類同様文様全体を要素とする。Bh類は絵文字のような文様が描かれているもの。Bi類は平面の縁にそって短い刻線文が施されるもの。C類…刺突文のみ施されているもの。Ca類はトークンの情報単位を読解する際、刺突文の個数が重要な判断材料となる可能性があるもの。列状に並ぶものをCa1類、平面の縁に沿って施されるものをCa2類とする。Cb類は全面にランダムに刺突され、孔の個数ではなく面全体の文様を情報単位の判断材料としているようにみえるもの。全面に施されるものをCb1類、面的一部分に施されるものをCb2類とする。D類…刻線文と刺突文併用型。ただし、3Be'2類はここに含めない。これは刻線文と刺突文の両方の情報単位を意味するのではなく、刻線文と刺突文とをセットにして情報単位の構成要素としていたと考えるからである。13類については、 α 容器、 β 鎌・石器、 γ 土偶?、 δ 家畜、 ε 加工された家禽類、 ζ 封泥された容器、 η 星の形状。
 - 9) 各遺跡で出土するトークンのタイプがウルク遺跡出土トークンと同タイプである場合○を付した。ウルク遺跡からは出土しな

いトークンも分類した。

- 10) 「各遺跡出土トークンのタイプ数/ウルク遺跡出土トークンのタイプ数」で計算した。スーサ出土で1A¹類のようにウルクにみられないタイプの存在は計算から除いている。
- 11) ハブーバ・ケビエラでは、これ以上のものが出土しているが詳細は未発表である。
- 12) 例えば3Bc1類は、従来9種類に細分されていた。
- 13) ハジュネビではエンヴェロップに封入されているトークンのみが見つかっている。チョガ・ミシュではE・I型双方のトークンが出土しているが、I型についての詳細は筆者には把握できなかった。
- 14) 情報ネットワークとはトークンを介して情報交換を行う人々の間に存在するものである。もしもエンヴェロップが移動性のないものであったとするなら、このネットワークは存在しない。

略語

UVB Lenzen, H., *Voläufiger Bericht über die von dem deutschen archäologischen Institut und der deutschen Orientgesellschaft aus Mitteln der deutschen Forschungsgemeinschaft unternommenen Ausgrabungen in Uruk-Warka, Berlin*, Vol.14, 1957 ; Vol.15, 1959 ; Vol.17, 1961; Vol.21, 1965 ; Vol.22, 1966 ; Vol.23, 1967 ; Vol.24, 1968 ; Vol.25 1974

図版典拠

図1 筆者作成。

図2 Schmandt-Besserat 1992b を基に筆者作成。

図3～7・表1 Schmandt-Besserat 1992a, 1992b; Bohemer 1984, 1985, 1999; Finkbeiner 1991; Lenzen 1959, 1961, 1965, 1968; Fueye et al. 1934; Mecquenem et al. 1943; Amiet 1972; Brun and Vallat 1978; Genouillac 1934; Pittman 1996; Lamberg-Karlovsky 1986; Tobler 1950; Oates, D. and J. Oates 1993; Emberling 1999; Jasim 1981; Pittman 1996; Frangipane et al. 1983; Frangipane 1994 を基に筆者作成

引用・参考文献

- Algaze, G. 1993 *The Uruk World System: The Dynamics of Expansion of Early Mesopotamian Civilization*. Chicago; University of Chicago Press.
- Amiet, P. 1966 Il y a 5000 ans Les Elamite inventaient l'écriture. *Archeologia* 12 : 16-23.
- Amiet, P. 1972 *Glyptique susienne*. Mémoires de la délégation archéologique française en Iran 43. Paris, Geuthner.
- Brun le, A. 1978 La Glyptique du Niveau 17B de L'Acropole (Campagne de 1972). *Cahiers de la Délégation Archeologique Française en Iran* 8: 61-79.
- Brun le, A. and F. Vallat 1978 L'Origine de l'écriture à Suse. *Cahiers de la Délégation Archéologique Française en Iran* 8: 11-59.
- Bohemer, M. R. 1984 Glyptik und Kleinfunde, Uruk-Warka XXXVI, Survey des Stadtgebietes von Uruk. *Baghdader Mitteilungen* 15 : 113-140.
- Bohemer, M. R. 1985 Kleinfunde, Uruk-Warka XXXVII, Survey des Stadtgebietes von Uruk, VI. *Baghdader Mitteilungen* 16: 119-148.
- Bohemer, M. R. 1999 *Uruk, Früheste Siegelabrollungen*. Ausgrabungen in Uruk-Warka Endbericht, Band 24. Mainz, Verlag Phillip von Zabern.
- Emberling, G. 1999 Excavation at Tell Brak 1998: Preliminary Report. *Iraq* 61: 1-41.
- Ess van M, Pedde, F. 1992 *Uruk, Klein Funde II*. Ausgrabungen in Uruk-Warka Endbericht, Band 7. Mainz, Verlag Phillip von Zabern.
- Finkbeiner, U. 1991 Die Klein Funde. *Baghdader Mitteilungen* 22: 16-18.
- Finkel, L. I. 1985 Inscription from Tell Brak 1984. *Iraq* 47: 187-193.
- Frangipane, M. 1994 Record Function of Clay Sealings in Early Administrative Systems as Seen from Arslantepe-Malatya. In P. Ferioli, E. Fiandra, G. Fissore and M. Frangipane (eds.), *Archives before Writing*, 125-136. Rome, Scriptorium.
- Frangipane, M. 1997 A 4th-Millennium Temple/Palace Complex at Arslantepe-Malatya: North-South Relations and the Formation of Early Sate Societies in the Northern Regions of greater Mesopotamia. *Paléorient* 23/1: 45-73.
- Frangipane, M, and A. Palmieri 1983 Cultural Developments at Arslantepe at the Beginning of Third Millennium. *ORIGINI XII/2*: 521-575.
- Fueye, A., Belaiew, N.-T., Mecquenem, R., and J.-M. Unvala, 1934 *Fouilles de Suse 1929-1933*. Mémoires de la Mission archéologique de Perse vol. 25. Archéologique, météorologie et numismatique susiennes. Paris, Éditions Leroux.
- de Genouillac, H. et al. 1934 *Fouilles de Telloh*. Epoques Présargoniques, vol. 1. Paris, Paul Geuthner.
- Green, M. W. 1981 The Construction and Implementation of the Cuneiform Writing System. *Visible Language XV/4*: 345-372.
- Jasim, S. A. 1981 *The Ubaid Period in Iraq*. BAR International Series 267. Oxford, British Archaeological Reports.
- Jasim, S. A. 1983 Excavations at Tell Abada: A Preliminary Report. *Iraq* 45: 165-185.
- Jasim, S. A. and J. Oates 1986 Early Tokens and Tablets in Mesopotamia: New Information from Tell Abada and Tell Brak. *World Archaeology* 17/3: 348-361.
- Lamberg-Karlovsky, C. C. 1970 *Excavations at Tepe Yahya, Iran, 1967-1969: Progress Report*. Bulletin of American School of Prehistoric Research no. 27. Cambridge, Mass. American School of Prehistoric Research, Peabody Museum, Harvard University.
- Lamberg-Karlovsky, C. C. 1996 *Beyond the Tigris and Euphrates Bronze Age Civilizations*. Beer Sheva 9. Jerusalem, Ben-Gurion University of the Negev Press.
- Lamberg-Karlovsky, C. C. and T. W. Beale 1986 *Excavations at Tepe Yahya, Iran 1967-1975: The Early Periods*. Bulletin of American School of Prehistoric Research no. 38. Cambridge, Mass. Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University.
- Lenzen, H. 1957 Liste der Funde aus dem Riemchengebäude. *UVB* 14: 30-35.
- Lenzen, H. 1959 Kleinfunde aus dem Bezirk des Steinstitfempel. *UVB* 15: 20-21.
- Lenzen, H. 1961 Die Kleinfunde. D. Siegelabrollungen auf Tontafeln und Krugverschlüssen, Kleine Tongegenstände. *UVB* 17: 29-37.
- Lenzen, H. 1965 Amulette. *UVB* 21: 32-33.
- Lenzen, H. 1966 Amulette. *UVB* 22: 40.
- Lenzen, H. 1967 Amulette. *UVB* 23: 45-46.
- Lenzen, H. 1968 Verschiedenes. *UVB* 24: 36-37.
- Liverani, M. 1983 Fragments of Possible Counting and Recording Devices. *ORIGINI XII/2*: 511-521.
- Mecquenem, R. de, G. Contenau, R. Pfister, N. Belaiew 1943 *Archéologie susienne*. Mémoires de la Mission Archéologique en Iran 29. Paris, Presses Universitaires de France.
- Michalowski, P. 1993 Tokenism. *American Anthropologist* 95: 996-999.

- Morrison, P. 1992 Book Reviews of Before Writing, Volume 1, by Denise Schmandt-Besserat. *Scientific American* 267/5: 92-93.
- Nissen, H. J. 1986 The Archaic Texts from Uruk. *World Archaeology* 17/3: 317-334.
- Nissen, H. J., P. Damerow and R. K. Englund 1991 *Frühe Schrift und Techniken der Wirtschaftsverwaltung im alten Vorderen Orient*. Berlin, Franzbecker.
- Oates, D. 1982a Tell Brak. In J. Curtis (ed.), *Fifty Years of Mesopotamian Discovery*, 62-71. London, The British School of Archaeology in Iraq.
- Oates, D. 1982b Excavations at Tell Brak, 1978-81. *Iraq* 44: 187-204.
- Oates, D. 1985 Excavations at Tell Brak, 1983-84. *Iraq* 47: 159-173.
- Oates, D. and J. Oates 1993 Excavations at Tell Brak 1992-93. *Iraq* 55: 155-199.
- Oates, J. 1985 Tell Brak: Uruk Pottery from the 1984 Season. *Iraq* 44: 175-186.
- Palmioli, A. 1981 Excavations at Arslantepe (Malatya). *Anatolian Studies* XXXI: 101-119.
- Pittman, H. 1996 Preliminary Report on the Glyptic Art: Hacinebi, 1993. *American Journal of Archaeology* 100: 230-233.
- Rothman, M. S. and B. Peasnell 2000 Societal Evolution of Small, Pre-state Centers and Polities: The Example of Tepe Gawra in Northern Mesopotamia. *Paléorient* 25/1: 101-114.
- Runnels, C. 1993 Book Reviews of Before Writing, Volume 1, 2 by Denise Schmandt-Besserat. *Journal of Field Archaeology*. 20: 515-517.
- Schmandt-Besserat, D. 1992a *Before Writing, Volume I: From Counting to Cuneiform*. Austin, University of Texas Press.
- Schmandt-Besserat, D. 1992b *Before Writing, Volume II: A Catalog of Near Eastern Tokens*. Austin, University of Texas Press.
- Stein, G. J. 2000 Material Culture and Social Identity: The Evidence for a 4th millennium BC. Mesopotamian Uruk Colony at Hacinebi, Turkey. *Paléorient* 25/1: 11-22.
- Stein, G. J. and A. Misir 1994 Mesopotamian-Anatolian Interaction at Hacinebi, Turkey: Preliminary Report on the 1992 Excavations. *Anatolica* XX: 145-189.
- Tobler, A. J. 1950 *Excavations at Tepe Gawara, Vol. II: Level IX-XX*. Philadelphia, University of Pennsylvania Press.
- Vallat, F. 1986 The Most Ancient Scripts of Iran: The Current Situation. *World Archaeology* 17/3: 335-347.
- van Driel, G. 1982 Tablets from Jebel Aruda. In G. van Driel, Th. J. H. Krispijnn, M. Stol and K. R. Veenhof (eds.), *Zikir Sumin: Assyriological Studies Presented to F. R. Kraus*, 12-25. Leiden, E. J. Brill.
- van Driel, G. and C. van Driel-Murray. 1979 Jebel Aruda 1977-1978. *Akkadica* 12: 2-28.
- 小口裕通 2002 「ウルク文化の「受け皿」としての北メソポタミア」『西アジア考古学』第3号 59-64頁。
- 小泉龍人 2001 『都市誕生の考古学』 同成社。
- 小泉龍人 2002a 「ウルク・ワールド・システムとは何か」『西アジア考古学』第3号 47-49頁。
- 小泉龍人 2002b 「ウルク・ワールドシステムの彼方」『西アジア考古学』第3号 67-73頁。
- 紺谷亮一 2002 「ウルク・ワールド・システムをめぐって－問題提起－」『西アジア考古学』第3号 45-46頁。
- 田野裕之 2000 「メソポタミアからの視点：ウルク・ワールドシステム」『日本西アジア考古学会定例研究会発表資料集第2号 メソポタミアと周辺地域－西アジアにおける中心と周縁－』日本西アジア考古学会第6回総会・大会実行委員会。
- 常木晃 1995 「交換、貯蔵と物資管理システム」常木晃・松本健編『文明の原点を探る－新石器時代の西アジア－』146-167頁 同成社。
- 常木晃 1997 「最古の都市文明」大津忠彦・常木晃・西秋良宏『西アジアの考古学』世界の考古学5 105-132頁 同成社。
- 前川和也 2001 「粘土板記録システムの成立と伝播」『日本西アジア考古学会第6回総会大会要旨集』5-8頁 日本西アジア考古学会第6回総会・大会実行委員会。
- 前川和也 2002 「南メソポタミアから見たウルク・ワールド・システム」『西アジア考古学』第3号 65-66頁。
- 藤井純夫 2002 「バーディアから見たウルク・ワールド・システム論」『西アジア考古学』第3号 55-56頁。
- 三宅裕 2002 「ウルク・ワールド・システム－アナトリアの場合－」『西アジア考古学』第3号 57-58頁。

木原 徳子

土浦市教育委員会

Noriko KIHARA

Tsuchiura City Board of Education